

まちかど対話（網走支庁地域） 各界各層の道民等との懇談 懇談録

日 時：平成21年11月9日（月）16時30分～17時35分

場 所：ホテル黒部（北見市）

出席者：

【相手側】

小野寺 健太さん 酪農、畑作、留辺蘂青年団体協議会会長
中島 康博さん 新聞販売、「みんなで花火をあげよう会」事務局長
大野 秀樹さん （株）後楽園代表取締役、（社）美幌青年会議所理事長
谷口 武彦さん 飲食店経営、元北海道商工会青年部連合会副会長
河野 智子さん 農業

【道 側】

高橋 はるみ 北海道知事
武田 準一郎 北海道網走支庁長

（武田網走支庁長）

それでは、ただいまから、まちかど対話の高橋知事との懇談会をはじめさせていただきます。私は、本日の司会を務めさせていただきます網走支庁長の武田でございます。よろしく申し上げます。

本日は、北見市、美幌町、訓子府町、置戸町で地域の資源を活かした、あるいは地域を元気に盛り上げている皆さんにお集まりいただきました。

それではまず最初に高橋知事からあいさつをお願いいたします。

（高橋知事）

改めまして皆さん、今日はお忙しいところこうやってお集まりいただきまして誠にありがとうございます。

私は、知事になりましてずっとですけれども、まちかど対話ということで広い道内を何回も巡らせていただいて、地域それぞれでユニークな地域資源を活用して地域おこしをやっている方々と会話を重ねさせていただいてきたところであります。今日は比較のお若い方を中心に、それぞれの地域で地域づくりをやっていらっしゃる方々ばかりでございます。限られた時間ではございますが、それぞれのご経験、あるいはそういったことを踏まえてのご苦労話、あるいは道全体に対するご提言など、いろいろざっくばらんにお話できればと思います。よろしくをお願いいたします。

（武田網走支庁長）

それでは、最初に出席者を私の方から紹介させていただきますので、立ってください。

まず、左手の方から、小野寺健太さん27歳。留辺蘂で酪農をされております。次は、中島康博さん。北見市で元端野町の商工会議所の青年部長をされていまして、いろいろな活動をされております。本業は某新聞ということで。次は、大野秀樹さんです。美幌町で(株)後楽園という、何って言えばいいのかな。

(大野さん)

本業は種苗業で山林用苗木の生産販売です。

(武田綱走支庁長)

美幌青年会議所で理事長をされて、様々な活動をされている方です。次が、谷口武彦さん。訓子府町からいらっしゃいました。元北海道商工会青年部連合会副会長ということで、全道の商工会の若者の中で知らない人はいないという谷口さんです。後ほどまたお話を伺いたいと思います。最後に、河野智子さんです。置戸町にお住まいで、今農業に従事されている方です。後ほどまた、お話をお伺いさせていただきたいと思います。よろしくお願ひします。

それでは、本日の進め方について、若干ご説明をさせていただきたいと思います。まず最初に、小野寺さんからの順番でそれぞれの方々がどのような活動をされているかということと、それぞれ皆さんが感じている地域の魅力ということをお話いただいて、前半三方、後半二方に分けて、それぞれお三人が終わった時に知事から一つご感想などをいただいて、皆さんのお話が一通り終わった段階で、オホーツクのこの地域の資源は何か、オホーツクのこれからの魅力は何か、そういうものをどうやって再発見していくか、そんなことを皆さんと一緒に話をしていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひします。

よろしいでしょうか、ご質問等あれば。

それでは、一番最初、一番若い小野寺健太さんからなのですがすけれども、小野寺さんは、本別の農業大学校を終わって、地元の留辺蘂のご実家が酪農をやられているということで、その仕事をやられていると聞いたのですけれども、そのお仕事のかたわら、留辺蘂の青年団体協議会の会長としていろんな活動をしていると、この前聞きました、その中でも、特に留辺蘂「留^{りゅうせい}青太鼓」という太鼓の活動をしていて、それは町のお祭りには欠かせないくらいの存在になっているだけではなく、全国的にも高い評価を受けていて、この14日にも全国大会に出場されるということを聞いているのだけれども、そんなお忙しい仕事をしながらも、活動に入ったきっかけとか、そこで感じた魅力とか、それらを通じた地域の方々との関わりについて少しお話をしていただきたいと思いますのですけれども。

(小野寺さん)

きっかけというのは、農家の先輩がそういう協議会に入っていて、ただ単に誘われて青年団に入ったのですけれども、入っているうちに、最初はあんまり参加しなかったのですが、いろいろ地域の他の町村の人との関わりを持つようになって活動が楽しくなってきた、ずっとやりはじめていて、そのうち太鼓をやっているというのがわかって、それも、ただやっている人からばちを渡されただけで、そこから始めて練習してお祭りとか、大会に出るようになって、それで太鼓良かったねとか、すごかったねと言われる度に自分でうれし

くなって、やっていて良かったなと思って、そのまま続けている感じですね。活動は、太鼓だけではなくて、こういうカルタとかも作っていて、それは切り絵が原盤になっています。

(高橋知事)

開けちゃっていいですか？

(小野寺さん)

大丈夫です。

(高橋知事)

留辺蘂カルタ。

(小野寺さん)

というのを作ってみただけです。

(高橋知事)

これは版画なのですか。

(小野寺さん)

切り絵です。

(武田綱走支庁長)

なんとなく動機というのは、先輩がやれやれって言うからやってみただけでも、そのうちにだんだんおもしろくなってきて、地域も元気になってきて、それがプラスの方に働いていっているという感じですかね。では、また後ほど小野寺さんにお話を伺うことにして、次は中島さんをお願いしたいと思うのですけれども、中島さんは北見市の端野地区で、しばらく途絶えていた花火大会を住民の方々の有志で復活させたというふうに聞いているのですけれども、また商工会の中では、青年部長という重職を務められていて、中島さんから見て、地域の魅力というのはどのような感じでしょうか。様々な活動を通じて、地域のこだわりという面からでも結構ですが、地域の魅力とか地域に対する自分のこだわりみたいなものを少しお話いただければと思います。

(中島さん)

知事も知ってのとおり、3年前に市町村合併で北見市となったわけなのですが、生まれも育ちも端野で、途中抜けたこともあるのですが、ほぼ端野にいる私としては、端野らしさというものを残していきたいという思いは常に持っております。その中で、端野の一番のお祭りということで太陽祭りというのがありまして、その実行委員長を経験した者、初代から13名ほど集まりまして、30回の記念の時に途絶えた花火大会を復活させましょうということで、端野らしさをどうやって出すか。ただお金を集めて、お金の^{あたい}値分花火

を上げるのであれば、どこの花火大会も同じものだと思っております、そこで何とかお金集めから端野らしさということで、チケット販売をするようになりました。その2,000円でビールパーティーに似たような感じなのですが、そのうちの1,000円分を花火代に充てるという名目で販売をしまして、ただ目標は花火代100万円を集めるまでということで、やってはいたのですけれども、何せビールパーティーはいろんなところでやっているものですから、チケット販売というのも大変なもので何かないかということで、個人の記念花火をどうだろうと、普通の花火大会では企業の寄付、宣伝PRという形で上げているのですけれども、個人で何か、結婚祝、出産祝、還暦祝、孫のためとかいろんな理由があると思ひまして、初年度PRさせていただいたのですが、そこで最初に出てきたのが、はじめた当時の厄年会というものがありまして、そちらの団体の方から出していただきました。2年目になりますと、本当の個人の方から、お友達の結婚祝いということで、みんなからお金を集めて上げていきまして、今年はそのお返しということでまた。毎年続く記念花火というものが上げられている状態であります。また、チケット等集めたお金ということで皆さん個人の方が、自分が花火を上げているんだという意識の元で、盛大に花火大会ができていると思っております。それが端野らしいものなのかは、自分たちの満足度でしかないのですけれども、今後もそういう流れの元でやっていきたいと思ひます。

(武田網走支庁長)

こないだ、いろんな仕事をしていたら、ある方からお手紙をいただいて、たぶんお孫さんが喜んだのだろうけど、「豊平川の花火大会より大きい花火なんてないよ、じいちゃん。」って言ったら、「端野の花火の方が、俺の頭の上で花火があがるので豊平川の花火大会より大きいのがあるんだね。」とじいちゃんがお孫さんが言ったかどうかはわからないけれども、随分うれしいという手紙を、中島さんがいただいて、中島さんたちが自分たちが苦労してきたことが、そういうふうには評価されていることが、次の活動に繋がるのかなということをお話を聞いたのでご紹介しておきます。

(高橋知事)

いい話ですね。

(中島さん)

はい。

(武田網走支庁長)

では、次は大野さん。大野さんは、先ほど音楽を流しておりましたが、美幌町に素人の方と言ったら怒られるけれども、普通の女性の方たちでアイドルグループBee Rushというのを、青年会議所が中心になって全部手作りで作り上げて活動している。今日もお一人傍聴席に見えているのですが、そんなような活動をしていると聞いているのですが、活動にあたり、どんなことを目指して、どんな成果を期待しているのか、最終的に今活動が途中なのかもしれないのですけれども、手応えとしてどんな効果があったかなというのを、

少しお話いただけますか。

(大野さん)

まず、美幌町のPRと、各イベントの活気、盛り上げたいということで活動しております。一般の公募で、美幌町内在住の方で、それこそ歌も踊りも素人の方に集まっていたきまして、音楽も地元の方が作って、ダンスも地元の方が作って、あとCDのジャケットの作成、全てが手作り。それで今歌って踊れる名産品ということで、美幌の観光ブランドにも認定されましたし、観光大使にも任命されまして、おかげさまで、地元のフリーペーパー伝書鳩さんに密着取材をしていただいたり、NHKさんにも取材をしていただきまして、視聴率換算でいうと、300万人以上の方に美幌町をPRできたという計算をしています。イベントの出演数も20回以上を超えているのですけれども、地元のイベントも過去最大数の入り込み数を記録したり、そういうふうに目的としてのPRと活気づけというのはうまくいっていると思います。最終的な目標としては、まちづくりをやっているのは、私たちのような男性が多いのですけれども、中には、彼女も(Bee Rushのメンバーを示し)普通のOLをされてますし、主婦の方もいらっしゃるりと、そういう方々の地元のふるさと愛、郷土愛を持っていればこういうようなことを通して地域に貢献できるんだよということを最終的な目標に、今、活動しているわけです。

(高橋知事)

すばらしいですね。

(武田網走支庁長)

札幌にいるとなかなかわからないのではないかなと思って、あえてこの曲を。

(高橋知事)

彼女は、この写真の中でどこにいるの。一生懸命今見ているのですが。

(Bee Rushメンバー Sayakaさん)

ティアラをつけています。

(高橋知事)

ちょうどこれ、ちょっと隠れている。

(大野さん)

ぜひ開けてみてください。差し上げますので。おかげで子どもたちにすごい人気がありまして、幼稚園とか訪問をしまして、子どもたちとふれあいながら、一緒に踊ったりしています。

(武田網走支庁長)

この間、大野さんにお話を聞いて、美幌の名物ってなんだろうねという話をしたら、美

幌峠はあるけれども、食べ物とか自分でもなかなか言えないのだけれども、若者が名物になるんじゃないか。今までは、形あるものとか、食べられるものとかで名物を探したのだけれども、こういうグループを作って、こういう人、活動を名物にできないかなというのを大野さんが言っていたので、なかなかおもしろい試みだなと思いました。

(大野さん)

若い子たちも、地元への郷土愛は持っているのです。それを我々青年会議所で、表現する場所を作った。ただそれだけなのですよね。

(武田網走支庁長)

ということで、前半の部終了して、知事からコメントをいただくことにしたいのですが。

(高橋知事)

それぞれユニークですよ。まず、太鼓とカルタと、これは一例でまたいろいろと留辺蘂のまちづくりということで、若い方が中心にやっておられるのでしょうかけれども、私は個人的に特に太鼓が好きなのですよ。音で、エキサイティングするというか。熱くなりません、気持ちが。

(小野寺さん)

はじめて聞いた時は思いました。

(高橋知事)

私はもういい歳だから、若い方はもっといいのではないかと思うのだけれども。その太鼓の音で地域のアイデンティティ(独自性)というところとちょっとかっこいいかもしれないけれども、青年団でいろいろやられるというのは、何かわかりますね。

それで、私は8月下旬にブラジルとパラグアイに行ってきた、道人会のご子息の90周年記念かな。それに行ってきたのだけれども、イグアスという滝が世界的に有名なんですよ。そのイグアスに北海道の方が農業で入植をされて苦勞をされて、1代目の人たちはもうほとんど亡くなっておられて、今は2世、3世くらいかな。ですからちょうど、小野寺さんと同世代の方たちが、イグアス太鼓というのを、私が地球の裏側から来たというのでやってくれたのですけれども、これはまさに日本の和太鼓なのですけれども、太鼓の素材も全部地元のブラジルのもので作ってるのですよ。でも、叩き方は2世、3世の方だからどうやって和太鼓をはじめたのかわかりません。でもやっぱり力強いどさんこ魂の太鼓だった。すごく感動しました。あーいう地域でもやっているし、道内でもいるんなところで太鼓自慢がありますよね。ぜひ留辺蘂、北見市に合併はされたのだけれども、端野もそうですけれども、でも、新しい北見市民であると同時に留辺蘂らしさも出すようなことも、そういった試みをこれからもやったらいいなと思います。全国大会も頑張ってください。

(小野寺さん)

ありがとうございます。

(高橋知事)

それから、中島さんは某新聞社の販売をやっている中で、花火の復活ですよ。これは、某新聞社さんはスポンサーにならないのですか。

(中島さん)

某新聞社は来年度以降検討していただきたいという話は。

(高橋知事)

そうですね。復活は自力でされたということで、特にいいのは企業のスポンサーだけではなくて、個人のPR、個人のスポンサーに目をつけられたというのはユニークですよ。これは冬はやっておられないのですか。

(中島さん)

夏です。元々やっておりました太陽祭りというのがありまして、端野町商工会時代にやっていたものが、前夜祭的なものでやっていたものですから、資材とかの準備の都合上、復活も前夜祭ということで前の日に合わせました。

(高橋知事)

だから、豊平川と比べてどうだというそういう話になるわけですね。

(中島さん)

そうですね。

(高橋知事)

もちろん、夏の方が夏祭りとか、子どもたちもお休みだし浴衣がけで出やすいというのはあるのだろうけど、私去年、陸別のしばれフェスティバルというのに行ったのですが、これ真冬の花火というのが、きれい。ご覧になったことがあります。

(中島さん)

見たことはないですけども、端野町も開基100年の時に、私はちょっと別で仕事をしていたんですけども、その時は冬に花火を上げたそうで、その時は、とてもきれいだったという話は聞いております。

(高橋知事)

空気が、冬の方が夏場よりも澄んでいるのですよね。陸別でのしばれフェスティバルは2月にあるのだけど、みんな地元の人であったかい、あったかいと言っていたけれども、-15くらいで私的に寒かったのですよね。普通より脂肪も少ないし。でも、花火のきれいさは夏よりもいいなと思って、そういうのもぜひ、某新聞社をスポンサーに入れて考えてもいいかなと思いますけれども。でも、結婚を祝う花火を上げたら、それのお返しで

その次の年にまたね。相互に見合って、心温まる端野らしい花火、これからも続けていただければと思います。

それから、美幌の大野さんはBeeRush、女性アイドル。これは、どうして男性アイドルではなくて、女性アイドルなのですか。

(大野さん)

若々しい女性の方が見栄えも華やかというのもありまして。(女性が)社会活動をしていないことがやはり気になるのですよ。皆さんできるはずなのですから、そこに踏み入れる勇気がないというのでしょうか。よく自治会とかの不満というのは、主婦層の皆さんが持っているじゃないですか。イベントが少ない、お祭りが少ない、全然この町はおもしろくない。そうではなくて、おもしろくないのであれば、あえておもしろく作ってしまおうよという発想を持ってやっています。

(高橋知事)

それを青年会議所が中心になってされたということですよ。確かに、私も、道政史上初の女性知事ですけども、今全国でも3人しかいないのかな。それから道内でも、いろいろな会合に行くと、黒っぽい背広姿の人が多いですよね。やっぱり、人口の半分は女性なのに少ない感じがしますよね。それを盛り上げていきたいということですよ。

すると男性にアピールですか。そうでもない?女性の方にもアピール?

(大野さん)

同世代の女の子に声かけられることが多い?

(BeeRushメンバー Sayakaさん)

高校生、中学生、学生さんが多いです。

(高橋知事)

男女共に盛り上がるのですね。

(大野さん)

男はやっぱりむさ苦しい。

(高橋知事)

そんなことない、そんなことない。私の歳になると、若い方もかわいいなと思ったりしますけれども。

まちづくり、地域づくり、人の活動を美幌の名物にするって、確かに北海道はおいしいものが多いから、食べ物で町の名物というのはいっぱいあるけれども、ソフトウェアというか人の活動というのはあんまりないかもしれませんね。花火も案外それに近いかもしれないですけども。太鼓のパフォーマンスなんかもね。

文化、歴史が少ないと言われる北海道だけれども、だからこそ人の活動で地域を盛り上

げるといのは、ぜひ美幌らしさでこれからも続けられたらいいと思います。

(武田網走支庁長)

どうもありがとうございました。後半の部に入ってまいりたいと思います。谷口さんは、地元訓子府町の野菜を活用して、いろいろな商品開発を手がけているとお伺いしています。商工会の青年部長でもいらっしゃるし、先月下旬には、旧訓子府の駅舎にぷらっとカフェ駅茶屋というのをオープンされまして、私も先日お邪魔してまいりまして、訓子府名物の訓子府かつ丼というのや、はちみつ入りのコーヒーというのをいただいてまいりましたが、谷口さんから見て、地域の資源、魅力とかそのようなものをどのようにお考えでしょうか。

(谷口さん)

訓子府の生まれではないのですが、親の転勤で小学生の時に訓子府町に来まして、子どもの時は訓子府にいて、その後修行の旅にあちこちら出まして、それでとりあえず帰って来いと強制的に帰されまして、訓子府町に10年くらい前に戻りました。しばらく途中、何年か抜けていたものですから、若い頃の時代は町にいなかったの、札幌だとか横浜だとか行ってました。帰ってきてみて、子どもの時にわからなかった特産品、タマネギだとか訓子府は生産量があるのですが、子どもの時はほとんど気にせず食べていたという現実です。ちょっときっかけがありまして、飲食店をやることになりまして、こんなにいい食材があるんだなということで、いろんな農家の人とも飲食店をやっていることで、知り合いになりました。何年か前に1日だけのレストラン、ビストロ訓子府を公民館を使って何度かやったりして、そこで仲間ができました。何か一緒に作ってみたいねという話をしているのですが、現実的にいろいろ問題がありまして、そこまで進んではないのですが、先ほど言われました駅の方は商工会青年部に入部しまして、いつの間にやら青年部長をやらされまして、北海道商工会青年部連合会副会長というところまでやらされたのですが、先ほど言った陸別町の本田さんは、僕は親友でしばれフェスティバルの話も聞きました。

(高橋知事)

青年部中心でやっていました。

(谷口さん)

一緒に北海道の会議とかに行ったりしまして、知事にも何度か総会とかに来ていただいたことがあると思うのですが、そういうところで仲間ができたものですから、その特産品や物産品などもあるので、訓子府町の特産品、物産品もそうなのですから、何とか広めたいなと思ひまして。訓子府町は電柱がない町なのです。電柱が地中化になってまして。それで真ん中にポケットパークという公園ができたのですが、そこはただ、本当の公園。噴水があるのですが、何も無いものですから、ビアガーデンを一週間やりましょうとかふるさと銀河線が走っていたものですから、駅のホームはほとんど使っていないということで、そこで今度は屋台村を一週間やりましょうということで、どんどん、どんどん新しいことをやっていったんです。遊休施設を使うのが大好きなものですから、先駆けになって使って、誰かがその後使ってくれればいいと思って。誰かが使うと違う場所に逃

げてしまうのですけれども、たまたま駅に何もなく、バスの待合室になっていたものから、そこに誰か店を出さないかというお話がありまして、そちらの方で喫茶レストランを10月29日オープンいたしまして、先ほど言いました特産品だとかも並べて、食事も訓子府の農産物を使ったものを提供できればなということで何とかやっているところでございます。

(武田網走支庁長)

それでは、最後になりますが、知事を除いて紅一点の河野さんにお話を伺いたいと思いますが、河野さんは置戸町の田舎体験「地遊人(じゆうじん)」という町の行っている取組に応募されて、その後置戸町に本格的に移住をされて、そして今農業を営んでいるとお伺いしてますけれども、地遊人に参加された後、現実的に移住するんだと決める動機になったのはなんだったのでしょうか。

その時の、動機と魅力というのはどういうものだったのか、ひょっとするとご主人に出会ったのが一番大きいのかもしれないのですがそれはちょっと除いておいて、その動機とその時に感じた魅力と今もずっと持っているものをお話していただきたいのですが。

(河野さん)

地遊人なのですが、田舎暮らしを体験しようという制度で、その応募の時にやる事業というのが、まず町の行事のお手伝い、それから農作業のお手伝い、木工や羊毛の草木染めとか織物とそういうものがいろいろ書いてあって、もともと農業の方はちょっと興味もありましたし、手作り、もの作りにすごく興味があったのです。いろんなことができそうだとということで応募しまして、実際来てみたら、いろんなことができ、これやりたいなと思ったら、公民館の事業だったのですけれどもいろんなサークルがあるし、そこに入れてもらってスタンドグラスやってみたり、織物やってみたり、陶芸やってみたり、本当にやりたいと思ったことが、何でもそんなに経費がかからないでできるということで、それがすごく魅力だったのです。ここだったら好きなこといろいろできるなとすごく感じていて、それで、たまたま主人と出会っていいかなというので、移住したのですけれども、実際住んでみて、何でこんなにできる町なのかなというのをよく考えると、置戸町というのがもともと社会教育の町で、図書館ができたのも早かったし、社会教育にすごく力を入れている町なのです。町民が、これやってみようかなと言ったら、公民館の方で、すごくバックアップしてくれるという町だからいろんなことができるのかなと。今でもそうなのです。その辺がすごく人づくりが良かったと思います。

地遊人制度も、私が初代で平成3年からですけれども、それから18年、ちょっと間があいた時もあったのですが、私のように結婚をして移住を試みたり、結婚はしないけれども、仕事を見つけて置戸に残りたいという人もすごくいるのですよね。実際、入ってくれる人、残ってくれる人は、音楽をやってみたり、まちづくりに興味があるから、まちづくりをやってみようかと声をあげてみたり、すごくおもしろい人がたくさん集まって、実際集まるだけではなく、形にできていると思います。

先ほどお話があった、女の人たちがあんまりそういう活動に参加していないという話もあったのですが、置戸の場合、おばさん達の方がパワーあるかなというくらいで、私のよ

うに手作りのものが好きな人のいろんなサークルがあって、それを実際売ってみようかというので、夏にMade in 置戸市というのを駅舎のところで開いて、手作りのものを販売してみたり、冬にもキッチンファクトリーという名前でそういうものをいろいろ販売してみたりだとか、通年でやってみようかと言って駅でお店を開いているグループもありますし、すごくそういうところで活動したいなと思ったら、何でもできる町だと思います。

(武田綱走支庁長)

ありがとうございました。それでは、後半部分、知事感想をお願いします。

(高橋知事)

谷口さんは、訓子府で地元の食材をいろいろ活用して、地域活性化活動の先駆けをやっておられるという話で、今は10月下旬にオープンしたぷらっとカフェ駅茶屋で、地元の食材を使ったおいしいものを出しておられるということですね。何というか、地域の活性化のやり方というのはそれぞれ前半の皆さま方もおっしゃっていたように、それぞれの発想、それぞれのやり方というのがあるのだろうけれども、前の小野寺さんなり中島さんなり、大野さん、谷口さんも共通すると思ったのは、何かやろうと思った時にやれない理由を見つけるのはたやすいのだけれども、あきらめない、やろうとすることをやるようにするためにどうすればいいか考えるというのは、前向きな地域づくりの根源であり、活動をやられる方の意識の中心じゃないかなと、私は前から思っていて、今、谷口さんの話をお伺いしていて、そんなふうに思いましたね。

そういえば、電柱がない町というのは、前に町長から聞いたような気もしてましたけれども。

(武田綱走支庁長)

土木現業所でやりました。

(谷口さん)

明日、見ていただければわかると思います。

(高橋知事)

明日、お邪魔するのですね。楽しみにしています。もちろん訓子府自体は何回かお邪魔したことはあるのですが、町の景観を最大限活用するような形でやられているこういった試み、これからも広げていただければと思います。

たぶん、大変なことは山ほどあると思うのです。そんなに一緒にやる気がある人がいるわけではないし、採算性のこともあるしね。大変だと思うのだけれども、それでもやり続ける。それから商工会青年部もJCもそうだけれども、地域を越えたネットワークができると、またいろんなノウハウというか、やり方の知恵というのが出てくるという気がするので、そういう刺激があるからこそやれたことかなと思っています。頑張ってください。

それから、置戸の河野さん。どこからいらっしまったの？

(河野さん)

私はもともと道内の日高で、教員やっていたものですから、一回学校で青森の方に行つて、帰ってきてやっぱり北海道の方がいいということで。

(高橋知事)

でも、日高もいいじゃないですか。置戸もいいけど。

(河野さん)

住みやすいと思いますけど。

(高橋知事)

すごく景色がきれいだし、サラブレッドもいるし、おいしいものもたくさんあるし、でも、やっぱりこちらの方が良かったですか。

(河野さん)

そうですね。

(高橋知事)

やっぱりご主人かな。あんまりそこは詰めません。

それで、今お話があって、置戸町のまちづくりという中で、昔から社会教育に力を入れてきた、そういうことに惹かれて、外の方が地域に移住してこられるというのは、これはやっぱり他の人口減少で移住を一生懸命進めている地域の方々に一つ参考になるかもしれませんね。外の町からやって来られた方々に、住み心地がいい感情を持たれるためには、もちろんおいしいものとか、住環境とか、就職の場があるとか、いろいろあるのだろうけど、やはり社会活動というか、サークル活動とか、そういう中で人の輪の中にすばっと入れるところがあるかどうか、大きいのですよね。その意味では置戸町のまちづくりというのが。

(武田網走支庁長)

明日、知事にもご覧いただきたいと思いますので。

(高橋知事)

はい。夜は置戸町長さんもいらっしゃるのかな。

(武田網走支庁長)

はい。

(高橋知事)

いろいろご苦労なんかも聞けるとは思いますけれども。置戸は女性が力があるのですか。

(河野さん)

女性もですね。すごく行事がたくさんあって、その間に入り込んでいる感じで、本当にみんながあっちにもこっちにも参加している感じで。

(武田綱走支庁長)

谷口さん、訓子府もかなりありますよね。

(谷口さん)

訓子府は、かなり作りました。

(河野さん)

お邪魔させてもらってます。

(高橋知事)

確かに、町一つ一つの人口は少なくなっているから、美幌は自衛隊がいるからそうでもないかもしれないけれども、連携は必要ですよ。北見みたいに合併まではいなくても。そんなような気がしますね。楽しんでください。

(武田綱走支庁長)

それでは、ちょっと失礼しますが、皆さまから一通りお話を伺いましたので、今、いろんなお話を伺った中で、ちょっと絞って、これからオホーツクって広い意味で言わなくてもいいし、皆さんの町という意味でも、もう少し広くてもいいのですけれども、地域の魅力高めていくためにどうしたらいいのか、その中で、地域の資源を活かすためにはどうしていったらいいのか、少し、今いろんなことをお話していただいた中で、少し突っ込んだ話をしていきたいのですが、ずっと話を聞いていると、資源の中に、ものではなくて人間というのも大事ですねというのが、ずっとあったように思うのですよね。そういう人が、育っていくというのは、自然があったり風土があったり、いろんなことがあると思うのですけれども、そんなことも含めて、これからどうやって地域の魅力を高めていくか。そのためには、どういう地域の資源を活かしていったらいいのかということ、今お話されたことに関わらず、お話をしていただければと思いますが。

どなたかいかがでしょうか。

大野さん、どうぞ。

(大野さん)

ありがとうございます。今後、まだ公表はしていないのですけれども、これからどうやって発展させていこうかということで、できればこのグループは今年いっぱい解散をしてしまうのですけれども、この意志を引き継いだ中で、アクターズスクールってわかりますか。沖縄で芸能活動をやっているものが有名ですが、美幌町で同等のそんなような活動の拠点になればと思って、企画を練っているところです。道東でも、田舎の方でもできる

という。新しいものをつくるというのは、時間が必要になりますし、探すにしても類似品がいっぱいあって、ものめずらしくはない。取り組んでいこうという部分で、美幌町内だけではなくて、オホーツク一円を見た中で歌のうまい方やダンスの上手な方、元気な若者、おもしろい人を探しながらやっていきたいと思います。

(高橋知事)

北海道出身で、ブレイクして全国区になった方も結構おられますよね。歌の分野でも、楽器の分野でも、あるいは演劇の分野でも、そういうアドバイザーみたいな人を1人おいてもいいかもしれませんね。

(大野さん)

ここの全てが、このCDの売り上げも収益は諸経費を除いて全て観光事業に寄付させていただいているのです。彼女らも全てのイベントが無償でやらせてもらっているのです。そういう意志を持った人たちを集めているのです。芸能事務所を作って収益活動をするのであれば、簡単なことなのですからけれども、そういう気持ちを持った人たちに活動していただきたいと思っています。

(高橋知事)

わかりました。

(武田網走支庁長)

谷口さんどうですか。

(谷口さん)

ちょっと話がずれるかもしれないですけども、オホーツク地域として、やっぱり農産物や、畜産物もそうなのですが、タマネギも北見地域というのが生産量も高くて、1位とか2位だと思うのですが、ちょっと詳しくはわかりませんが。どうしても、本州の方に行くと、北海道産となるのかな。そういうところで、オホーツク産というブランドをもう少し力をいれていかなければだめなのかなと。海産物は意外とオホーツク産って強いと思うんですけども、オホーツク産タマネギとか、オホーツク産じゃがいもとかあんまり聞かないかなと思うのです。どうしても、北海道産。僕も向こうに住んでいたわけではないのでわからないんですけども、そういうことなのかなと。でも、タマネギは収穫量にしてはこの地域がほとんどをやっているのではないかなと思うのですよね。オホーツク産タマネギを知事にも広めていただければと。

(高橋知事)

タマネギはそうかもしれないけれども、馬鈴薯の方は、量的には十勝なのかな。

(武田網走支庁長)

量でいくと十勝なのです。

(谷口さん)

オホーツクって弱いのかな。

(武田網走支庁長)

十勝はブランドなのですよ。

(谷口さん)

北海道といえば、十勝と思われるのは。

(武田網走支庁長)

それで今、網走支庁はオホーツクブランドをどう作っていくかということで、オホーツクブランドアイデンティティ (ブランドの本質や方向性、目的や意味のこと) というところで、つくつくオホーツク (オホーツクブランドのキャラクター) 。

(高橋知事)

私も持っています。

(武田網走支庁長)

これを、谷口さんおっしゃっていたように、来年度は物のブランドではなくて、地域のブランド、例えば、ボルドーのワインがうまいね。その中に何とかシャトーがあるねというふうに、北見だとか網走だとかいう前に、ボルドーだとかオホーツクという概念を作って、そうなんだ、オホーツクのあるこのなんだというふうに、みんなでしたいねということで、私たちも一生懸命頑張りましたのでご支援よろしくをお願いします。

(高橋知事)

北海道って広いので、今おっしゃったような北海道の統一ブランドというのも一方で重要なものだけれども、その中のオホーツクブランド、十勝ブランド、日高ブランドというふうに、二つ同時に売っていかないとだめなのですよ。食べる物でもそうだし、観光でもそうだし。でもやっぱり、その両にらみをやっていくことによって、さらにお客さんが増えてくるということになるのかなと思うのと、もう一つは、今日皆さんのお話の中で、谷口さんのところに少しでてきたのですけれども、これまでもやってきたのですが、これからさらに、地元のすばらしい素材の付加価値を高める。付加価値をこの北海道の中で高めて、それを売っていくことをさらに一生懸命やっっていこうと思っていて、特に食クラスターということを大々的に売り込んでいこうということも考えているのです。というのは、素材はいいのですよね。タマネギにしる、馬鈴薯にしる。ただ、そのまま道外に持って行くのではあんまり儲けにならないのですよ。北海道全体として。ただそこに、オニオンスープにするとか、ジャガイモについても、うまく言えないけど、いろんな付加価値を高めて製品化して売るということによって、やはり北海道のGDP (総生産) の向上につながるということで、付加価値向上大作戦をやっているのですよね。北海道は食糧供給基地、食料

自給率200%なのですけれども、これはカロリーベースの話であって、生産額という金額ベースだとなんととなりの青森にすら負けるのです。悲しいことに。これはやっぱり、もう少しなんとかしなければならぬなと思っていて、ぜひそういう中での、オホーツクでのアイデンティティを高めていただければと思います。

(武田網走支庁長)

どうぞよろしくをお願いします。

その他どうですか。私が言ったことにこだわりませんので、何か知事に話を聞いて欲しいというふうに頭を切り換えてもらっても結構ですので。どうですか。

(小野寺さん)

仕事のことになっちゃうのですが、どうしても北見に限ったことなのですけれども、酪農が弱いので、もうちょっと。頑張っているのですけれども、畑作に負けた感がどうしてもでてきて。なんて言うのかな。頑張っているのだけれども、認められない感がして、何かやりがいを感じない時がある。酪農全体が落ち込んだ時もあったので、もっとどかんといかないかなと思っているのです。

(高橋知事)

まあね、後継者としての悩みがあるのですよね。となりの芝生ってよく見えるのですよ。畑作やっておられる方々ね、それはそれで大変だろうし、北海道トータルで考えた場合に、酪農王国北海道と言うし、畑作王国北海道というし、そもそも食糧供給基地北海道なので、トータルのそれぞれの分野ごとにどちらがどちらより大変だということは私はないと思うのですよね。ただ、それぞれの地域の中での個々の農家さんの経営の中で、大変さ具合というのはやっぱりそれは地域性もあるだろうし、この辺だと漁業もすごいいいですもんね。日本海側なんかと比べると水産業がいいということもあるし、なかなかつらいけど、頑張る以外にないんじゃない。

(小野寺さん)

やっぱりそれしかないですかね。

(高橋知事)

商工会青年部の話も出ていたから、農協だったら農協、農連だったら農連、道内酪農はいろんなところでやっているじゃないですか。そういうところの若い人達と意見交換だとか、そうするとまた改善の余地とかいろんなことが見えてくることもあるかもしれないですね。

(武田網走支庁長)

今日、いろんな方と知り合いになったので、いろいろ話をしてみると、皆さんもいろんな苦労をしてくれているので、僕なんかよりは実際の生活の中でアドバイスがあるかもしれない。これを機に。

(高橋知事)

今日の中で、純粹サラリーマンはいないか。あれ、中島さんはでも、一次産業ではないですよ。

(中島さん)

違いますね。

(高橋知事)

御社で伝書鳩さんなんかも扱っている？

(中島さん)

また別なのですけれど。

(高橋知事)

あれは町内会？

(中島さん)

一企業のフリーペーパーです。

(高橋知事)

失礼しました。

(武田網走支庁長)

河野さんはいかがですか。

(河野さん)

今、農業の方の話が出たので、うちのだんなも農民協議会とかで役の方に行っているの
でいろいろ話を聞くのですけれども、よく北海道の野菜は安全っていいですよ。反対に
輸入のものってそんなに報道はされないけれども、実際に行ったらすごいい話を聞くの
です。その辺は、報道の方ではあまり出せないのかなっていうのが、すごく家では言うの
ですけれども、実際行ってみたらいいって言うのですけれども、遠くて。横浜の港の方を
見てきたらいいという話はするのですけれども、行けないので。もうちょっとそういうの
を広げたらいいかなという気もするのですけれども。

(高橋知事)

輸入野菜の安全性という話ですよ。

(河野さん)

輸入してきて、加工したらその特産品になってしまう。

(高橋知事)

原産地表示というのが必ずしも、消費者の立場からして、しっかり知りたい情報が知り得る状況になっているかという、なかなかそうではないですよ。そう聞きますよね。

(河野さん)

全然話が違う方に行っちゃったのですけれども。

(高橋知事)

北海道は寒冷な気候だから、もともとクリーン農業で農薬の量なんかも少なくていいし、もともと安全安心に最も自然体での近い状況にある。その中で、それぞれの生産者の方のご努力の中で、そのクリーン度をさらに高める努力というのを各地各地道内しておられて、やっぱり人のところが悪いというネガティブキャンペーンってあんまり私も個人的に好きじゃないし、やるのも難しいと思うのだけれども、北海道のものが私たちのものが、トレーサビリティ(生産履歴管理システム)も含めて、酪農も含めて、一番なんだとそれはもっともって我々アピールしていく必要があるでしょうね。

鮭だってそうなのでしょう。輸入物のノルウェーのサーモンだって、油がのってきらきら光って、消費者からみるとおいしそうに見えて、北海道の鮭は、見栄えという意味ではあれだけれども、安全安心で、おいしさはピカイチだと。そういうことをアピールしていくということではないですかね。

(武田網走支庁長)

逆に中国の方の方が評価するようになってしまいました。

中島さんは、よろしいですか。最後に何か一言だけお伺いして。

(中島さん)

田舎根性丸出しと言われるかもしれないですけども、皆さん各この5人、自分のところが一番だと思っっているいろいろなプライドを持ってやっていますので、陰ながら見ていただければやっているこちらもやりがいがあるかなと思いますので、よろしく願います。

(高橋知事)

わかりました。

(武田網走支庁長)

いい締めくくりをしていただきました。

(高橋知事)

すばらしい。

(武田網走支庁長)

最後に知事から一言。たくさんお話されましたけれども、何か締めのお言葉をちょうだいしたいと思います。

(高橋知事)

では、一言だけ。あっという間に時間が経ってしまいました。今日は、北見、美幌、訓子府、置戸からお集まりいただいた5人の皆さま方と懇談をさせていただきました。地域づくりというのは、別にビジネスモデルがあるものではなくて、一つ一つの手作り、一人一人のそれをやろうとする方々の創意工夫でできるものだと私は思っております。北海道はそういった地域づくりを皆さん方それぞれの分野でされる上で、もっとも種となる地域資源が多い地域だと私は思っております。その意味では、これからもそれぞれのお立場で皆さま方頑張ってくださいことを、お祈り申し上げます。今日はありがとうございました。

(武田網走支庁長)

それでは、本日の会をこれで終了させていただきます。

(了)

記 念 撮 影



(左から)後列：大野さん、谷口さん、中島さん、武田網走支庁長
前列：小野寺さん、高橋知事、河野さん、Bee Rush Sayakaさん